



希望の灯を与える 平和のためのスポーツ

『スポーツを通じた民族融和の可能性を考える—南スーダンにおける平和構築の取り組み—』には、世界で一番新しい国、南スーダンの国民が、スポーツにより、国民としての一体感を築きあげた過程が記される。平和構築の一つの鍵となる民族融和とスポーツの可能性について、著者で静岡県立大学教授の古川光明氏が解説する。

近年世界は混迷を深めている。冷戦後、紛争の形態が国家間から、国内紛争へとシフトする中、民族間、宗教間などの対立が顕在化した。また、今世紀に入り、米国での同時多発テロ、イスラム国（IS）の台頭など、民主主義や市場経済といった国際秩序の根底を揺るがす事態が生じている。そこに追い打ちをかけるようにして新型コロナウイルス感染症が猛威を奮い、多くの犠牲者を出すとともに、グローバル化に逆行するように人々の移動が制限された。さらに世界の混迷に拍車をかけたのが、ロシアのウクライナ侵攻だ。これらの状況が重なり合うようにして国際社会の複雑さが増す中、国内のみならず、国を超えた信頼が低下してきているように見える。

しかし、この状況下にあっても希望と熱狂を与えてくれたのがスポーツだ。2022年11～12月にカタールで開催されたサッカーワールドカップでは、日本は優勝候補の一角であるドイツ、スペインを次々と破った。国民は熱狂し、一体感を覚え、日本人としての誇りを感じた。それは、日本だけではなく、世界の多くの人々を熱狂の渦に巻き込み、人々は国の誇りを感じ、そして、世界中が沸き立った。まさにスポーツの持つ力を問のあたりした瞬間だった。

このスポーツの持つ力は、2000年9月に国連で採択されたミレニアム開発目標（MDGs）とともに広く認識され、国際社会では「開発と平和のためのスポーツ」支援が本格化していった。しかしながら、日本の政府開発援助（ODA）においては、スポーツを通じた支援はいまだ主流化されていない状況にある。

さて本書の対象は、南スーダンの全国スポーツ大会：「国民結束の日」（National Unity Day、NUD）である。

南スーダンは半世紀に及ぶ内戦を経て、2011年7月にスーダンから独立した最も新しい国だ。しかし、独立から約2年半後の2013年12月に紛争が勃発した。その

後、和平合意がなされ暫定政権が樹立したものの、予断を許さない状況が続き、国家建設に必要な国民や民族間の信頼が崩壊した状況となった。そのため、新しく誕生した国家にとって「民族融和」と「社会的結束」は重要な課題となったが、どの国際協力ドナーも社会的結束をテーマとする支援を真正面から取り上げて来なかった。この状況下、「平和と結束」をテーマとして日本が支援したのが国民結束の日である。国民結束の日は独立後初めて2016年1月に全国の地域を代表する若者が首都のジュバに一堂に介して行われた。

本書では、国民結束の日の開催背景や大会の模様、国民結束の日の支援の効果などについて論じている。その中では、第1回国民結束の日と同じ年に開催されたりオ五輪、そして2021年の東京五輪に国民結束の日に参加した南スーダンの選手が躍動するまでの過程を描く。さらに、スポーツを通じた平和構築支援が国内の民族融和のみならず、国を超えての絆の構築に発展し、母国への希望の灯を与えるものとなったことを、筆者の実体験に基づくエピソードとともに紹介している。ぜひとも読者には、スポーツを通じた開発と平和の可能性を味わってほしい。

